

國學院大學學術情報リポジトリ

D.C.ホルトムの日本宗教研究の性格について：
その経歴の検討を通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅, 浩二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002277

D. C. ホルトムの日本宗教研究の性格について

—その経歴の検討を通じて—

菅 浩 二

はじめに

國學院大學（以下「本学」）には、米国人の日本宗教研究者ダニエル・クラレンス・ホルトム（Holtom, Daniel Clarence 一八八四～一九六二）の旧蔵書・約三百六十冊が所蔵されてゐる。ホルトムは、英語圏の神道研究者としては一九二〇年代から四〇年代にかけて最も著名であり、「その価値についての正当な評価と、その行き過ぎに対する批判の双方を伴ひながら、総合的な神道研究を為した、おそらく唯一の西洋人研究者が、ダニエル・C・ホルトム博士である」⁽¹⁾とされる人物である。

本学の蔵書台帳によると、これら日文及び英文の書籍（以下「ホルトム旧蔵書」）はホルトムの晩年、昭和三十四（一九五九）年六月二十日に本学日本文化研究所（当時）に受入られたものである。当時同研究所において受入れに携はつた平井直房・現名誉教授によると、この「ホルトム旧蔵書」は、ロックフェラー財団人文学部長ファーズ（Fahs, Charles B.）の好意により、同財団が購入した上で本学へ寄贈されたものである。またホルトムと本学担当者の間を仲介したのは、第二次大戦後の日本占領期に宗教行政に携はり、以降も日本の宗教界・研究界に関はつた米人宗教学者ウッダード（Woodard, William）であつた⁽²⁾。

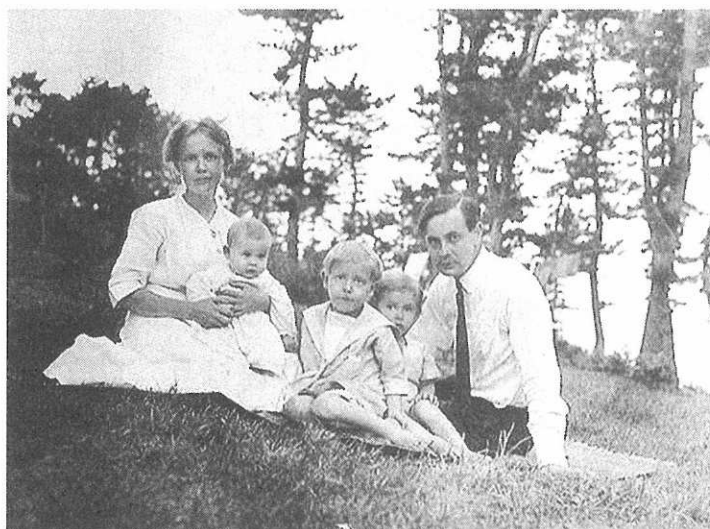
現在、この「ホルトム旧蔵書」の再整理と分析の試みが、複数方面の問題関心に基づいて始められつつあり⁽³⁾、筆者も、宗教と近代ナショナリズム論を専攻する立場からの検討を試みてゐる。今後、ホルトムの各研究業績の内容的考察が、この旧蔵書との関係性を明らかにしながら進められて行くであらう。



D・C・ホルトム（結婚式写真）



ホルトム（関東学院教授時代か）



行楽中のホルトム一家（大正4（1915）年）



「雷神塔」とホルトムの子供達

本稿ではこの期に臨み、従来その研究業績の存在感に比較して、殆ど注目されてゐないホルトムの経歴と、彼の研究方向性の関連について考察を試みる。但し現段階では、筆者は未だホルトムの経歴・業績について検討の途上にあり、本稿は経過報告に留まつてゐる事を了承願ひたい（なほ、以下本稿に於ける引用箇所では原典が英文の場合は、特に断らない限り既に邦訳がある場合も含めて、全て筆者による試訳である）。

1 先行研究によるホルトムの業績の位置付け

従来よりホルトムについては、その研究業績が、昭和二十（一九四五）年十二月十五日に、連合国最高司令部より日本政府宛に発令された「国家神道、神社神道に対する政府の保証、支援、保全、監督並に弘布の廃止に関する件（Abolition of Government Sponsorship, Support, Perpetuation, Control, and Dissemination of State Shinto (Kokka Shinto, Jinja Shinto)）」即ち「神道指令（Shinto Directive）」に強い影響を持つたことが指摘されてゐる。

神道指令の起草過程そしてその運用実態については、大原康男による業績を参照されたい⁽⁴⁾が、特に「神道指令」起草過程で、民間情報教育局（Civil Information and Education Section 以下「CIE」）の宗教部門担当官であつたバンス（Bunce, William Kenneth）は、ホルトムの著作を参考書として熱心に読んだ、とされてゐる⁽⁵⁾。

そもそも、当初CIEはホルトム本人に助言者としての来日を希望したが、健康上の理由から実現しなかつた、といふ経緯がある。またCIE発足の時点でその教育部門が、学校教育と神道に関する政策について、ホルトムの勧告書を受け取つてゐる。大原の説明から借用すると、このホルトム勧告書は「日本の教育制度の欠陥に通曉し改革に賛同する文部大臣の任命、教員の適格審査の必要性、主として歴史・修身の教科書から神話的・非歴史的材料の除去、神格天皇観の修正、御真影奉拝儀式の廃止、教育勅語の再検討、天皇と国家及び天皇と国民の関係の根本的改革、神社の強制参拝の禁止、神道的儀式への参列の自由、神社・神職に対する国や地方公共団体の支援の漸減、神祇院

の廃止と神社管理の文部省への移管など、極めて具体的に提言」してをり「占領初期にCIEが行なった教育・宗教政策のほとんどを網羅」するものであつた。大原は更に「CIEはホルトムのこの勧告書を重要な手がかりとして、これらの政策を次々に立案・実施していったのではなかろうか」としてゐる⁽⁶⁾。

さてその正式名称が明示する通り、この神道指令といふ行政命令は、その禁圧対象を「国家神道 (State Shinto)」と呼称してゐる。具体的に神道指令が禁止してゐるのは、「非宗教」を理由とした国家行政・教育と神社・祭祀の結びつき、及び天皇と日本国家・国民・国土は神に起源するが故に、他国に優越するとする「軍国主義的乃至過激ナル国家主義的イデオロギー」等であり、これらを総称して「国家神道」と呼んでゐる。この標的としての「国家神道」定義そのものが、ホルトムの著作に見る用語 State Shinto (国家神道) に依拠してゐることも、既に大原のほか、ウッダード、阿部美哉、高橋史朗、新田均などの諸先学が指摘・検討してゐるところである⁽⁷⁾。加へて、このホルトムの State Shinto 観には、親交のあつた宗教学者・加藤玄智が提示した「国家的神道」といふ概念の影響があることも、これら先学によりしばしば論じられてゐる。ホルトムが、加藤が主宰した明治聖徳記念学会の会員であつた事、また本稿冒頭で紹介した「ホルトム旧蔵書」に加藤の著書が七冊も含まれてゐる事や、両者の著述内容の検討からも、加藤のホルトムに対する影響関係が推測されてゐる⁽⁸⁾。

以下は、昭和十年に出版された加藤の主著『神道の宗教発達史的研究』に示された、加藤の分類である。一神道は「国家的神道」と「宗派的神道」の二つに大別できる。「宗派的神道」は十三派に分かれ、文部省宗教局管轄下で「宗教」の範囲に置かれてゐる。他方の「国家的神道」は更に、内務省神社局の支配を受ける「神社神道」と、文部省監督下で学校教育の精神でありまた帝国憲法下の政治の精神でもある「国体神道」の二つに分けられる。この「国家的神道」は行政上宗教扱ひになつてゐないが、自分（加藤）の視点からは「国家的神道も勿論宗教であつて、その外形形式の方面は主として神社神道として表はれ、その精神内容は国体神道として、古今一貫その存在を保持して来てをる」⁽⁹⁾。本稿ではこれ以上立ち入らないが、加藤が「国家的神道」

の名を与へて肯定的に訴へようとしたものは、煎じつめれば彼の目から見た、神社の国家的宗教性（「神社神道」）および天皇信仰の宗教性（「国体神道」）であり、その意義である。そして、この加藤が提示する「国家的神道」概念は確かに、神道指令が標的と定めた「国家神道」に対応してゐるやうに見える。

反面、早くウッダードが指摘し、起草の中心人物であるバンス自身も一面に於いて認め⁽¹⁰⁾、大原も論じてゐるが、神道指令には、解体の対象としての「国家神道」及び「軍国主義的乃至過激ナル国家主義的イデオロギー」と、真正面の標的ではない「神社神道」の関係性について、認識に曖昧な点が見られる。島蘭進が「狭義」と「広義」として整理を試みてゐるやうに、神道指令に於けるこの曖昧さは、「国家神道」をめぐる戦後の議論に、混乱を呼びこむ原因となつた⁽¹¹⁾。同じ語が意味するところが研究者の視座により大きく異なり、議論が錯綜する状況となつたのだ。特にこの「国家神道」の語が、やがて司法判断にも登場するほど人口に膾炙したために、混乱の度は社会的規模に拡大し、今日では政教問題をめぐり、立場の異なる者同士の議論が硬直化する事態をも生み出してゐる。

新田均は、葦津珍彦の問題意識⁽¹²⁾を踏まへ、かうした混乱と議論の硬直化を突破するために、強大な「国家神道」体制の存在を自明とする近代日本史理解一般への懐疑、といふ視座を設定した。その上で新田は、自身の視座から政教関係を議論する上では「国家神道」概念は不要である事を論じ、更に進んでこの概念はそもそも、加藤個人が「かくあるべし」と想定した理想状態に過ぎず、歴史的実体を伴はない「幻想」である、と断じた⁽¹³⁾。新田は早く、加藤の特に対教育論について「加藤の議論におけるこのザインとゾレンの微妙な関係を、ホルトムはどの程度理解できたのであろうか」⁽¹⁴⁾としてゐたが、後にはホルトムを端的に、加藤が産み出した「国家神道」といふ「「幻想」の媒介者」の役割を果たした人物、と位置づけるに至つてゐる。

「国家神道」概念について、現状で筆者の観点から言へることは以下の通りである。神道指令を基準として考へれば、「国家神道」はあくまでも同時代的な占領行政の標的であり、解体の対象であつた。他方で歴史的構築物として、この言葉をどの歴史現象に定位しどの範疇で把握するかは、後世の歴史研究

者の視座とその説得力（客観性の担保）の問題である⁽¹⁵⁾。この後者の観点は、過去からその同時代までを含めた「歴史」的対象への、研究者の視座の問題として、神道指令以前の状況にも遡及させ得るものである。かうした問題意識から先行研究を見て気づくのは、何故ホルトムが加藤の訴へる「国家的神道」概念を重く受け止めたのか、の理由が、加藤の側についての「ホルトムと親交があつた」「英文の著作があつた」との説明以上には、殆ど為されてゐない事実である。言葉としての「国家神道」は、いはば研究者が、自分の視座から見えるある範囲の現象をまとめて入れた容器に、貼り付けるラベルに書く名前に過ぎない。その言葉は確かに加藤→ホルトム→バンスと受け継がれたが、その価値評価は、加藤とホルトムの間で逆転してゐる。

日米戦争只中の、一九四三年刊行のホルトムの著作 *Modern Japan and Shinto Nationalism*（『現代日本と神道ナショナリズム』）は、戦後に補遺を付して再版され、更にこの再版本が『日本と天皇と神道』の訳書名で、占領下の日本でも出版された。その中でホルトムはかう述べてゐる。

日本が、自らの「聖戦」と号する東アジアの戦ひに身を投じたその根底には、我らは世界の救世主として遣はされし者なり、との確信が存在してゐる。…実際、日本の国家構造が全世界で最強かつ最良であるとの教義は、当然の結果として、日本以外の諸人民はその統治下に入つてのみ益を得る、との理想を生むことになる。もしも、この確信的な使命感が主張される際の熱意と揺ぎ無さを、単に「精神的不満感や不安定感の埋め合はせを求めてゐるだけだ」とか、「一方の絶望的な経済的必要性と、他方の非征服人民に対する（その主張とは一訳補）裏腹な過酷な態度を、敬虔さを装つた中身の無い言葉で覆ひ隠してゐるだけだ」などと解釈してしまつては、事実を見誤ることになる⁽¹⁶⁾

後述する通り、ホルトムは本書出版の二年前まで、総力戦体制に突入した日本に住んでゐた。彼の祖国が、今や日本人とは血で血を洗ふ状況にある中で、の著作である事を考慮しても、ホルトムが如何に、当時日本社会が帯びてゐ

た熱狂に真剣に向き合ひ、その宗教性といふ命題を深刻に考へてゐたか、が知られる一節であらう。

阿部美哉は、ホルトムは著作の中であまたの事例を紹介してはゐるが、基本的に英国人チェンバレン (Chamberlain, Basil Hall) の一九一二年の著作『新しい宗教の創造』(The Invention of a New Religion) の論旨を忠実に祖述してをり、チェンバレンほどの視点の鋭さはない、と評してゐる⁽¹⁷⁾。チェンバレンとの比較は興味深い論題ではあるが、本稿の範囲を越える。ここで注目すべきは、むしろホルトムが数多くの事例を紹介してゐる事実のはうであらう。ホルトムの業績はその引用事例の豊富さの故に、神道指令策定の参考としても重視された、と見るのが自然だからだ。

ホルトムがかくも深刻に、日本の神社と天皇信仰の宗教性に向き合はうと(立ち向かはうと、の方が正確かもしれないが) した理由は何なのか。資料的制約もあり本稿では未だ限られた考察しかできないが、以下ではこの点について、加藤の影響云々を一端離れて、ホルトム自身の経歴に即して論じてみたい。加藤の「国家的神道」概念をどう評価するにせよ、ホルトムも、自らの経験と観察によつてたどり着いた地点から State Shinto を論じたはずである。その事の意味は決して軽視できない。

2 宣教師・教育家・研究者として —ホルトムの経歴について

以下に、ホルトムの死去の際、『アメリカ人類学会会報』物故者欄に掲載された略伝記事(以下「略伝」)の全訳を掲げる⁽¹⁸⁾。

ダニエル・クラレンス・ホルトム

一八八四—一九六二

一九六二年八月十七日、米国第一の神道研究者がカリフォルニア州サン・ガブリエルの自宅で逝去した。自らは民族学者という地位を謙虚に拒んでゐたけれども、ダニエル・ホルトムの大変用心深い日本の民俗宗

教研究は、人類学調査における古典に属するものである。他の如何なる外国人も—そして日本人でも僅かな者しか—彼の土着文献への展望そしてたゆまざるフィールド観察の域に達してはゐない。彼は日本中を、神社から神社へ歩き回り、神職たち・崇敬者たち・研究者たちそして農民たちに話を聞き、比較と実証のために注意深く記録していった。彼の博士号（シカゴ大学、一九二二年）は歴史学によるものであり、彼の職分はこの専攻における教職にあつた。人類学的文献を数多く読むことにより、人類学への強い関心が引き起こされたのである。彼は一九三一年以前のある時期にアメリカ人類学会の会員となりほぼ一九五五年まで所属し続けたが、生涯の多くの部分を日本で過ごしたため、もし研究会議に出席したことがあるとしても、それは稀なことだつた。彼は様々なミッション系大学で教へ、シカゴ大学客員教授（一九二五～六）を務め、また同大学のハスケル講座での講義を行なつた（一九四〇年頃）。彼はまた、一九四〇年代にコルゲート＝ロチェスター神学大学およびレッドランド大学でも講義した。

彼が、神職養成の場たる東京の國學院における神道史連続講義への出講を求められた、といふ事實は、それ自身で全てを物語つてゐる。日本の宗教指導者達は彼の学識を敬愛し、彼の誠実さを信頼した。一例として、一九二五年に日本仏教の或る有力教派の管長が、日本に於ける軍国主義者の勢力拡大を予見し、戦争を回避するためにアメリカ人キリスト教徒と連携した平和への努力が可能かどうかを確かめようと、彼に接触したことがあつた。悲しげに彼はその書き手に語つたのである。「正直に申し上げなければならないでせう。昨年私は合衆国内の数多くの教会を訪ねました。そして、どんな方法であれ彼ら〔キリスト教徒〕が、今なほ彼らにとつての「異教徒ども」である人々と協力する意思を持つかも知れないといふ希望は、薄いものだつた事を打ち明けなくてはなりません」

日本の現在の天皇が即位した時（一九二八年）、ホルトムはその複雑かつ由緒ある儀式についての学術的で、読み応へある解説及び分析を出版

した。本書について、東京帝国大学の神道教授である加藤玄智博士は書いた。「…適切な位置にある適切な人物による優れた業績の一コマは、…我々歴史家の論考を有効に用ゐてをり、その故に憶測に陥る事が回避されてゐる。それと同時に、彼は自身の独自の研究を基に新たな解釈をも進めてゐる。」他の日本人書評者たちは熱烈にコメントを寄せてゐる。かうした〔即位〕儀礼が今後も繰り返されるかどうかは憶測の域を出ないが、ともあれ幸ひな事に、ホルトムによる丁寧な解説は、これらの儀礼の古代的な形を記録保存したのである。

彼の主著 *The National Faith of Japan* (『日本の国民的信仰』) は、日本警察の検閲による削除のため損なはれた。この本は英国での印刷のため日本でタイプされてをり、そして失はれた二つの章は再構成できてゐない。第二次世界大戦後の神道の衰微は、ホルトムの全ての業績の価値を高めるものとなつてゐる。新しい世代の日本人たちは、神道がかつてどのやうであつたかについて少ししか知らないのだ。彼の博士論文 (*The Political Philosophy of Modern Shinto* 『現代神道の政治哲学』) は、日本の帝國的冒険の背景を考察する上で、恐らく現在に於いても最良の資料である。連載物の形式のみとなつてゐる彼の *The Meaning of Kami* (『カミの意義』) が単行本として出版される事を、人類学者たちは強く望んでゐよう。

一八八四年七月七日にミシガン州ジャクソンに生まれ、一九〇七年にカラマズー大学から学士号を受けた彼は、ニュートン神学校から神学士号を、そしてカラマズー大学とブラウン大学から名誉学位を受けてゐる。彼はアメリカ・バプテスト海外伝道協会により日本へ派遣され、東京学院の現代語学教授 (一九一四～五)、日本バプテスト神学校の教会史学教授 (一九一五～二五)、関東学院の歴史学教授 (一九二六～三六) を、そして青山学院の神学部長 (一九三六～四〇) を務めた。彼は A.A.A.S. の会員であり、日本アジア協会の評議員 (一九二一～四〇) で、一九二四年と二七～八年には同協会会報の編集者であつた。晩年書く事が不自由となつたが、彼は周到さと精神的旺盛さを保ち続けた。彼の遺族は、妻の旧名メアリー・グレース・プライス、そして五人の息子のうちの二人、ジ

ョン及びハロルド＝トーマスである。

ダグラス・G・ハリング

シラキューズ大学

この略伝（以下「略伝」）には「編集部が把握した限りの、D.C.ホルトムの民族誌関連の著作」といふ目録が付されてゐる。英文で発表されたものに限られてゐるが、日本宗教研究者としてのホルトムの業績の大要を把握できる目録であるので、書名・論文名の和訳を付して、「ホルトムの民族誌関連著作目録」として本稿末尾にもそのまま転載した。

ここで、基本的なことを幾つか確認しておかう。ホルトムが宣教師として来日したことは先行研究でも触れられてゐるが、この記事ではその他に教育者・研究者と、複数の職分を持つ人物であつたことが明記されてゐる。執筆者のハリング（Haring, Douglas G.）は、戦後の米国に於ける琉球・奄美諸島研究の先駆者とされる文化人類学者である。そのハリングは、本来ホルトムは歴史学者だつたが、その業績は民族誌としての側面でも高く評価されるものであつた、としてゐる。ホルトムが数多くの事例を採集し、紹介した業績への評価と見るべきであらう。なほ、ホルトムを日本に派遣した「アメリカンバプテスト外国宣教協会（American Baptist Foreign Mission Society, ABFMS）」とは、奴隷制と海外布教をめぐる南北対立から、一八四五年にアメリカのバプテスト教会が分裂した際の「北部」派の組織である。

次に、この「略伝」に名前の見える関東学院『関東学院百年史』の一節「関東学院の教師たち」に、ホルトムの項があるので、一部内容的に重複するが全文紹介したい⁽¹⁹⁾。

D・C・ホルトム（Daniel Clarence Holtom）

一八八四年七月七日、アメリカに生まれ、アメリカバプテスト・ミッションの宣教師となつて一九一〇年来朝した。東京学院教授となつて主に英語を教え、一五年からは、日本バプテスト神学校教授となつて、二六年まで神学、宗教学を教授した。二六年から中学関東学院に転じ英語

を教え、翌二七年に財団法人関東学院が成立し、神学部で、宗教学、歴史を教授した。三六年に、関東学院神学部が青山学院神学部に合併したので、青山学院神学部教授となり、のち神学部長となった。四一年、日米関係が険悪になったので、帰国した。日本在留三〇年間、日本研究とくに神道の研究にはげみ、神道研究家として知られている。道端の祠や神社は彼の興味の的であり、神官たちも喜んで、ホルトムの研究に協力した。また古事記・日本書紀など日本の古典をよく読み、日本精神を理解しようと努力した。当時の宣教師は、西洋文明の優位を誇示して日本に関心をよせなかったが、ホルトムは、日本と日本人を形成している精神的要因ならびに、日本が直面している諸問題を明確にするためには、神道の日本人に対する関係を究明しなければならないと考えた。同時にこのことは、日本をより深く理解し、また日本人の精神の真の自由を得るようになるために貢献し得ると信じていた。二二年に“The Political Philosophy of Modern Shinto”を出版するまでは、同僚の宣教師たちは、日本の宗教家たちと交流していることや、神社を歴訪している事の意味を理解できなかった。つづいて“The Japanese enthronement Ceremonies” 1928. “The National Faith of Japan” 1938. “Modern Japan and Shinto Nationalism” 1943. を出版、すばらしい業績をのこし、その権威者として高く評価された。太平洋戦争中は、アメリカに帰っていて、アメリカの陸軍、海軍当局から日本に関して質問を受けることが多かったが、決して日本人に対して悪感情をいだかせるような発言はしなかった。戦後の日本の処理に対する多様な論評に対して意見をのべ「天皇は日本国民の統合の中心であるため、その処理の如何によっては、戦後処理に困難を増大させる可能性が大きい」と警告している。戦後、日本に進駐したアメリカ軍は、占領政策について、ホルトムの意見を聞くため、日本に招聘したが、彼の健康がそれに堪えることができなく、日本への再来は実現しなかった。パーキンソン病のため身心が衰弱し、六二年八月一三日永眠した。

細かい点として、「略伝」とこの『関東学院百年史』記事（以下「百年史」）では死去の日付が異なつてゐるが、あまり重要な問題ではない。なほ「略伝」には記されてゐなかつたが、この「百年史」に見るやうにホルトムの来日は、韓国併合のあつた明治四十三年（一九一〇）年のことである。

この「百年史」記事は、バプテスト派の日本宣教史に関して多くの著作を持つ大島良雄の「D・C・ホルトム」（『いんまぬえる』第一〇号（一九七七・一）掲載。『いんまぬえる』は関東学院全体の宗教活動広報紙）を元に書かれてゐる。この大島の元記事により、ホルトムが比較的早くに日本語を習得したことや、「二二年に“The Political Philosophy of Modern Shinto”を出版するまでは、同僚の宣教師たちは、日本の宗教家たちと交流していることや、神社を歴訪している事の意味を理解できなかった」との記述が、その「同僚の宣教師」のひとりで、明治二十四（一八九一）年から昭和六（一九三一）まで日本伝道に従事したワインド（Wynd, William）の著述からの引用であることがわかる。

東京学院は明治二十八（一八九五）年に設立されてゐる。一方、今日に至る米本土の南北バプテストの分裂状態とは別に、当時日本のバプテスト宣教や教育現場では現実的対応として、両派の協力関係もあつた。日本バプテスト神学校はそのやうな協力関係の中で、ホルトムが来日した明治四十三年に、両派の神学校が合同して成立してゐる（大正七年に南部バプテスト側が再分離した後、同校は東京学院と合併）。宣教師としてのホルトムの活動については、未確認の点が多く現時点で詳細をたどる事はできないが、総じて各地教会での伝道よりも、東京学院・日本バプテスト神学校・関東学院に於ける、教育者及び理事者としての学校運営に軸足を置いて行はれてゐたやうである⁽²⁰⁾。

ホルトムは来日五年後の大正四（一九一五）年には、休暇帰米中の東京学院院长J・F・グレセットに代はり院長代理を務めてゐる。当時数年間ではあるが、キリスト教主義大学設立を目指し、東京学院やバプテスト神学校の一部と、長老派に属する明治学院との一部に合同授業が試みられる（大正三～五）などしてゐる。建国以来の事情から、国家の干渉から独立自由な領域で、プロテスタント各教派が競つて独自性を強調し、その事が結果的に宗教への社

会的認知度を維持し、高めてきた米国本土の状況とはかなり異なる日本の状況に、ホルトムは複雑な思ひで臨んだことであらう。同時に「略伝」及び著作目録から、ホルトムが本格的に神道研究に取り組むやうになつたのが、この時期以降であることも知られる。

ホルトムは、昭和十（一九三五）年四月に関東学院神学部長となつてゐるが、「百年史」にあるやうに同神学部は一年後には廃止され、メソヂスト派である青山学院神学部と合併、ホルトムも青山学院に移籍してゐる。青山学院と関東学院の両神学部の合同授業はその数年前より行はれてゐたが、これはこの頃（昭和八（一九三三）か）、関東学院の神学部学生多数がキリスト教社会運動への関与から、思想犯として警察に検挙される事件が起きたことも影響してゐるやうだ⁽²¹⁾。

筆者は、バプテストの神学や信仰一般に関するホルトムの著作については、その所在も含め全く未見である。もともと異なる信仰を積極的に評価する傾向をあまり持たないプロテスタント諸派の中でも、バプテスト派は特に自らの信仰的覚醒度を重視する教派である。このことを考慮すれば、ホルトムの神道研究が、布教・教育の対象である日本社会と日本人の宗教性とその限界を見極めることで、「回心」の契機を探る目的に発したものであることは想像に難くない。その一方で、彼はさらに研究者としても活動する事で、自らの信仰と日本人たちの示す特異な宗教性・精神性を比較するために、後者を観察・記録し考察していく、といふ姿勢を持つやうになつたのであらう。

振り返つて「略伝」を見ると気付くのは、執筆者ハリングに、あたかも神道なる現象が、対象として人類学者の観察の目にさらされ記録されなければ、独自の意味を持たないかのやうな書き振りが、僅かながら見られる点である。西欧植民地主義の進展と反省の中で成長した文化人類学が、二十世紀半ばに至るも残してゐた、ある種の前時代的姿勢ではあらう。では「民族学者という地位を謙虚に拒んでゐた」宣教師・教育家・歴史学者ホルトムは、この点でどのやうな意識を持つてゐたのだらうか。今後明らかにしたいところである。

3 “The Political Philosophy of Modern Shinto” (『現代神道の政治哲学』) について —むすびにかへて—

以上本稿では、ホルトムの著作内容には殆ど触れず、その業績に対するこれまでの評価と、彼の経歴との関係性のみを論じてきた。これは初めに述べたやうに、筆者の研究の導入部として、従来ホルトムの業績の存在感に比して、その経歴があまり論じられてゐなかつた点を解消するためである。紙幅も余り残されてゐないが、最後に、その出版まで同僚宣教師たちにすら、ホルトムが「日本の宗教家たちと交流していることや、神社を歴訪している事の意味を理解できなかった」といふ、彼の歴史学博士論文 *The Political Philosophy of Modern Shinto* (『現代神道の政治哲学』) の内容をごく簡単に紹介する。そして、本書が示すホルトムの神道・日本宗教研究の方向性について述べ、本稿の綴目としたい。

A Study of the State Religion of Japan (「日本の国家宗教の研究」) といふ副題を持つ本書は、既述の通り一九二二(大正十一)年に『日本アジア協会会報』に発表された。各章の章題を日本語にすると以下の通りである。

- 第一章 歴史的概論 (Historical Introduction)
- 第二章 神社問題 (The Shrine Problem)
- 第三章 日本人の神道解釈：倫理的定義 (Japanese Interpretation of Shinto: The Ethical Definition)
- 第四章 日本人の神道解釈：宗教的定義 (Japanese Interpretation of Shinto: The Religious Definition)
- 第五章 カミの意味 (The Meaning of Kami)
- 第六章 公式祭祀の神話：原初の父母 (The Mythology of the Official Cult: The Original Parents)
- 第七章 太陽の女神祭祀 (The Cult of the Sun-Goddess)
- 第八章 官国幣社 —結論 (Government and National Shrines. Conclusions)

以上の本編に、欧語及び日本語の参考書籍一覧、神社及び神職についての統計が付されてゐる。

詳細な検討は別稿に譲りたいが、本書の論旨自体はさほど複雑なものではない。主題と副題に示された通りで、要約すれば「現代神道は、天皇中心主義の政治哲学に裏付けられた国家宗教である」に尽きよう。確かに阿部が評したやうに本書は、当時の外国人が神道を論じた著作としてはその博引旁証ぶりが突出してゐるものの、視点としてはその十年前にチェンバレンが提示した〈明治中期に文武官僚により、天皇崇拜を中心に作り出された新しい「忠君愛国」宗教〉が現代日本でまかり通つてゐる、との域を余り出てはゐない。

本書第五～六章でホルトムは、日本語の「カミ」について、その語源・語義をめぐる古代以来の日本の諸説をえんえんと比較するほかに、世界の他の古代宗教等の事例との比較や、神話研究の視点も用ゐて論じてゐる⁽²²⁾。しかしあくまでも彼の主題は、かうした古代以来の精神世界を背景としつつも、明治日本で形成され目の前で実践されてゐる現代神道の政治哲学にある。本書では、未だ State Shinto の語は見えないが、official Shinto や official cult 等の語がその代りにしばしば登場する。

先に神道指令にも或はその後の「国家神道」概念にも、国家イデオロギー的な部分と神社神道との関係性の認識に、曖昧さや混乱があることを述べた。先行研究には、ホルトムが加藤の論理を咀嚼できなかつたことに、この原因を求める傾きもまま見られる。しかるに、加藤の学説は第四章で、寛克彦らの学説と共に考察の対象とされてゐるが、ホルトムは加藤の「神道の宗教的解釈」の特徴や、当時におけるその特異性まで含めて、かなり正確に認識してゐるやうに見受けられる。

むしろ実は、本書全体の主題そのものが、日本政府の「神社非宗教」行政の論理と実践が既に、政治的な統合と神社祭祀の関連付けの点で、曖昧さ・矛盾を内包してゐる、との指摘なのである。その中では当然、当時の神社国家管理制度・祭祀・祭神も主要な検討課題とされてゐる。だがそれと共に論述の随所で言及され参照されるのは、章題には全く現れてゐないが、学校教育関連の諸事象である。ホルトムの根本的な問題関心はむしろ、教育の中で的人格形成と政治・宗教の関わりにある、と見たほうが良い。彼が来日以来、基本的に学校教育界にあつたこと、CIEに提示した「勧告書」も教育問題に

重点が置かれてゐたこと、等を想起したい。

未だ検討の途上ではあるが、現段階では筆者はかう考へてゐる。ホルトムは本書を執筆した時期、日本社会の中での、人間が神（或いはカミ）を「信仰する」ことと、祭祀に「参列する」ことの関連の見えにくさ、について、彼なりに何とか理解しようと格闘してゐたのではなかつたか。当時、その見えにくさは日本社会に於いても、当に加藤が同名の書籍として編集した「神社対宗教」論争⁽²³⁾といふ形で、キリスト教や仏教側などからの疑問符として提示されてゐた。本書でも『福音新報』などから、当時のキリスト教徒たちの神社への様々な意見が引用されてゐる。その意味で本書は、おそらく神道や神社と、それまでまともに向き合ふことすらしなかつた「同僚の宣教師たち」に〈我々が直面してゐるのは、法体系上は隠れた異教であり、しかも国家的宗教である〉といふ意識を持たせるものだつたのであらう。

本書 *The Political Philosophy of Modern Shinto* は神道研究書である以上に、この「神社対宗教」時代を、歴史学・宗教学の知識ある米国人宣教師教育家が考察した記録として、今日の問題意識から見ても一級の資料的価値を持つてゐると思ふ。筆者は当時の流動する日本の「宗教」概念の検討や、或いは同時期の諸国に於ける世俗ナショナリズムの「宗教化」の問題を比較検討するためにも、「旧蔵書」を参照しながら、同書および他のホルトムの業績の更なる考察を続けたい。

註

- (1) Creemers, Wilhelmus H. M. *Shrine Shinto After World War II*. Leiden, E. J. Brill, 1968. p. 3.
- (2) 平井氏より筆者聞き取り（平成二十年十月二十四日、ご自宅にて）。
- (3) 例へば、神話学方面から「外国人による日本神話研究の歴史とその影響に関する研究」（日本学術振興会科学研究費補助・若手研究B 研究代表者：平藤喜久子・本学研究開発推進機構日本文化研究所専任講師）の中で分析が進められてゐる。
- (4) 大原康男『神道指令の研究』原書房、平五。

- (5) 大原前掲書九頁。ただし同書五二頁の記述によると、バンスの助言者として招聘された宗教学者・岸本英夫（当時東京帝国大学助教授）が、十月二十二日にバンスに提供した五冊の神道関連書籍を見る限り、ホルトムの著作は *The National Faith of Japan* のみで、他はアストン（Aston, W. G）と姉崎正治の著作である。
- (6) 大原前掲書十三頁参照。
- (7) ウッダード「連合軍の占領と日本の宗教」（『国際宗教ニュース』第三巻五・六号、国際宗教研究所、一九七二）、高橋史朗「神道指令の成立過程に関する一考察」（『神道宗教』一一五号 神道宗教学会、昭五九・六）大原前掲書三二五～七頁、新田均「加藤玄智の「国家的神道」論」（『近代政教関係の基礎的研究』大明堂、平九 所収）など参照。
- (8) 大原前掲書三二六～三三〇頁。ホルトムと加藤の交流がどのように始まり、二人の間にどのような意見交換があつたものかは未詳であるが、接触の場としては日本アジア協会が推測される。他に、宮本誉士「明治聖徳記念学会と加藤玄智—学会創立前後を中心として—」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十三号 平十八 所収）も参照。
- (9) 加藤玄智『神道の宗教発達史的研究』（中文堂書店 昭一〇、復刻版は大空社 平八）。Kato, Genchi. *A Historical Study of the Religious Development of Shinto*. translated by Shoyu Hanayama. New York. Greenwood Press 1988. 英訳版の原版は、昭和五十八（一九七三）年に文部省ユネスコ委員会から出版されたものである。
- (10) Woodard, W. P. *The Allied Occupation of Japan 1945-1952 and Japanese Religions*. Leiden, E. J. Brill, 1972. 阿部美哉訳『天皇と神道—GHQの宗教政策』（サイマル出版会、一九八八）は同書本文の全訳である。
- (11) 島蘭進「国家神道と近代日本の宗教構造」（『宗教研究』三二九号 日本宗教学会、二〇〇一年 所収）ほか参照。
- (12) 葦津珍彦（阪本是丸註）『国家神道とは何だったのか』神社新報社、平十八（原書 昭六二）参照。
- (13) 新田均『「現人神」「国家神道」という幻想』PHP研究所、二〇〇三 参照。
- (14) 新田前掲「加藤玄智の「国家的神道」論」三一頁 参照。
- (15) 拙稿「神権政治と世俗的動員の間に—「国家神道」と総力戦—」（本紀要第二号、平二〇 所収）参照
- (16) *Modern Japan and Shinto Nationalism*. pp. 19-20
- (17) 阿部美哉「翻って平成時代の宗教の課題を問う」（田丸徳善編『現代天皇と

宗教』徳間書店、平二 所収）五〇～五一頁 参照。

- (18) American Anthropological Association, *American Anthropologist*, New Series, Vol. 65, No. 4, (Aug., 1963), pp. 892-893.
- (19) 『関東学院百年史』（非売品、一九八四）四三二～四頁。
- (20) 大正十二年に茨城県「土浦バプテスト講義所でホルトム博士からバプテスマ（浸礼）を受けた」人物の記録があるほか、水戸での伝道記録もあるが、詳細は未確認である。なほ、D. C. ホルトムの曾孫に当たるEvan Jones氏が、母親のKatharine Holtom Jones氏（D. C. ホルトムの息子Harold Thomas Holtomの娘。現カリフォルニア州在住）が保管してゐたホルトム家所蔵の写真をwebsiteに掲載してをり、その中には地名未詳の日本各地の風物も写されてゐる。Katharine氏は「幼い頃、祖父がModern Japan and Shinto Nationalismの改訂版を出すために、タイプライターを叩いてゐたのを憶えてゐる」さうである（筆者宛emailより）。本稿に掲載したホルトムの写真は、筆者がKatharine氏の許可を受けて転載してゐるものである。<http://www.scoopjones.us/> を参照のこと。
- (21) 以上前掲『関東学院百年史』参照。なほ、ホルトムが合同後の青山学院でも神学部長を務めた、との記述は「略伝」にも「百年史」にも見えるが、『青山学院九十年史』（非売品、昭四〇）など青山学院側の文献では、当時の神学部長は大村勇であるとされてをり、この辺りの詳細も分からない。
- (22) 大正十年刊行の『明治聖徳記念学会紀要』第十六号に、ホルトムがイザナギ・イザナミ神を天父神・地母神として捉へた講演“The Ancient Japanese Sky-father and Earth-Mother:aStudy in Shinto Origins”とその論評が掲載されてゐるほか、次号以下にも同主題のホルトムの英語論文が連載されてゐる。これが本書第六章の原型と思はれる。
- (23) 加藤玄智編『神社対宗教』（明治聖徳記念学会、大一〇）参照。

D.C.ホルトムの民族誌関連著作目録

(出典: *American Anthropologist*, New Series, Vol. 65, No. 4, (Aug., 1963))

- 略号: SIAR Smithsonian Institution, Annual Report (『スミソニアン研究所年報』)
 TASJ Transactions, Asiatic Society of Japan (『日本アジア協会会報』)
 MN Monumenta Nipponica (『モヌメンタ・ニッポニカ』)
 FES Far Eastern Survey (『極東通覧』)
- 1913 Shintoism and its significance. (『神道とその特徴』) SIAR. Art. 2304, pp. 607ff.
- 1922 The political philosophy of modern Shinto. (『現代神道の政治哲学』) TASJ. XLIX part II (Supplement) Pp. iv+325
- 1927a The Christian Message and Shinto (『キリスト教のメッセージと神道』). Japan Christian Quarterly, July: 1-9
- 1927b 書評 B. Horioka, *Nihon Oyobi Hantaiheiyo Minzoku no Kenkyu*. (堀岡文吉著『日本及汎太平洋民族之研究: このたゞよへる国』 富山房、昭和二年): The Trans-Pacific, Nov.12.
- 1928 The Japanese Enthronement Ceremonies (『日本の即位儀式』). Tokyo: Kyo Bun Kwan. Pp. x+146.
- 1931 Some notes on Japanese tree worship (『日本の樹木信仰ノート』). TASJ ser. 2 VIII: 1-19.
- 1938a Japanese votive pictures (The Ikoma Ema) (『日本の奉納絵画』(生駒絵馬)) MN 1#1: 154-164.
- 1938b The National Faith of Japan (『日本の国民的信仰』). London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd. Pp. xiii+329.
- 1940-41 The meaning of *kami* (『カミの意義』). MN 3#1: 1-27; 3#2: 32-53; 4#2: 25-68.
- 1943 Modern Japan and Shinto Nationalism (『現代日本と神道ナショナリズム』). Chicago: The University of Chicago Press. Pp. ix+178.
- 1945a The Japanese mind (『日本人の心性』). New Republic 112: 742-744.
- 1945b Shinto in the postwar world (『戦後世界に於ける神道』). FES 15: 17-20.
- 1946a Shintoism (『神道』). In: E. Jurji, ed., *The Great Religions of the Modern World*. Princeton: Princeton University Press. Pp. 141-177.
- 1946b The new status of Shinto (『神道の新しい立場』). FES 15: 17-20.

- 231 D. C. ホルトムの日本宗教研究の性格について
- 1946c 書評R. Ballou, Shinto the unconquered enemy. (R. バーロウ『神道・克服されざる敵』) The Review of Religion, November: 46-50
- 1946d The new Emperor (「新しい天皇」). FES 15: 69-71
- 1947a Ideographs and Ideas (「表意文字と観念」) FES 16: 220-223
- 1947b Modern Japan and Shinto Nationalism, rev. ed. (改訂版『現代日本と神道ナショナリズム』(※邦題『日本と天皇と神道』)) Chicago: The University of Chicago Press. Pp. ix+226.
- 1956 The storm god theme in Japanese mythology (「日本神話に於ける嵐の神の主題」). Sociologus (Berlin) 6: 44-56